（様式第８号）

事業報告書（令和４年度）

事業名　旭川上流・下流の小学校の総合学習を基にした地域との連携による地域環境課題の改善

団体名　一般社団おかやまエコサポーターズ　　担当者名　小桐　登

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

１．活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

☆岡山市立小串小学校　3･4年生

【　2022 年度　学習の方向性について　】

桃太郎探検隊として、学校の裏山や地域にある干潟や海岸などの自然観察を通して、地域の環境を理解し、地域での課題を見つけ自分たちでできる課題解決を考え、地域に情報発信し、中和小との交流を通し、川上と川下のつながりやその違いを体験的に学ぶ。

･4 月 14 日に学校裏山にてタケノコ堀り実施、児童と教師にて。

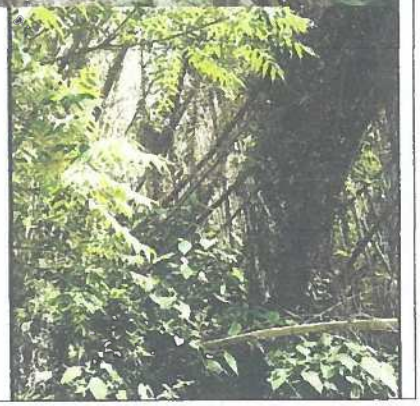
① 6 月 2 日　岡山市立小串小学校　3･4年生 7 名　アサザ基金飯島氏とおかやまエコサポーターズ 2 名による第 1 回目の ZOOM の授業。毎年、小串小　桃太郎探検隊と称して授業を実施。

･授業開始直後通信不通のためエコサポーターズにて授業進行。

竹林の様子や掘って食べたタケノコ料理のことなどを児童からヒヤリング。竹の成長や竹と生活の繋がりそして、現在は放置されている竹林と新しい活用について講話。

･ZOOM 回復後、飯島氏授業。自然はありがとうでつながっている。人間と竹のありがとうのつながりがなくなり、 放置された竹林が鬼ヶ島になっていることを改めて伝達。

･残った時間で裏山へ出かけ、竹林の様子を観察・共有。タケノコを掘った場所あたりを歩き、暗い竹林や日が当たる場所で植物が生えているところを紹介。100 年に一度見られる枯れた竹林を確認。帰りに竹皮を拾い、おにぎりを包む食器になることを説明して終了。今後は、地域で普通に見られるものを見ながら地域のお宝探しを実施。



（様式第８号）

② ６月15日 岡山市立小串小学校 3･4年生７名 アサザ基金飯島氏とおかやまエコサポーターズ２名による第２回目の授業

・竹と人間のありがとうのつながりを実感してもらうために、竹の皮、弁当箱、竹の器、蒸し器、竹灯篭などを持参し、暮らしのつながりを説明。

・ZOOM で飯島氏より、中和小と小串小は旭川でつながっていて、そこにもありがとうのつながりがあること、交流授業をするまでにそれぞれのお宝を探すことなどを伝達。

・川から海へのつながりの話し：岡山県は花崗岩が多いこと花崗岩は川を流れてきて、砂浜を作り、そこには、カニなどの生き物がいることなど。

・2コマ目の授業で近隣の海岸で生き物観察。飯島氏はスマホのビデオ通話で参加。

・学校傍の神社で砂の元、花崗岩を観察、近隣の家の塀の土台や水路の石としての利用を説明。花崗岩の井戸のそばでアカテガニ発見。生垣のウバメガシが県南特有の樹木であることを児童に伝達。

・住宅地の傍の海岸で、花崗岩の砂を好むハクセンシオマネキ、石垣の中のヒライソガニ。海岸に漂着した流れアマモを発見。カニを怖がっていた女子児童も慣れてきて、カニ取りに夢中となる。カニは、何を食べる？ 見つけた２種類のカニの絵を描く、ハクセンシオマネキが済んでいる場所の小串のマップを作ることを次回までの宿題にして授業を終了。

（様式第８号）

③10 月 6 日　岡山市立小串小学校　3・4年生７名　第３回目の授業実施。 授業実施場所は、徒歩 20 分ほどの向井小串の干潟・海岸での生き物観察。

・干潮の日時を選び生き物観察。海岸への道中で、これまでになく多くの種類の鳥を確認。いずれも干潟で餌探し。サギ類はコサギ、ダイサギ、アオサギ、他ハソボソガラスやトビの姿があり。

・飯島氏は ZOOM での出演、おかやまエコサポーターズ２名で、児童達の生き物探しのサポートを行いました。

・干潟はぬかるんでおり、立ち往生した児童を助けようとした教師が足を取られ泥んこになるという事態も発生。

・テッポウエビやイソスジエビ、エビジャコの他これまでは、見られなかった南の方に住むいきものトゲシャコが発見。海の温度があた

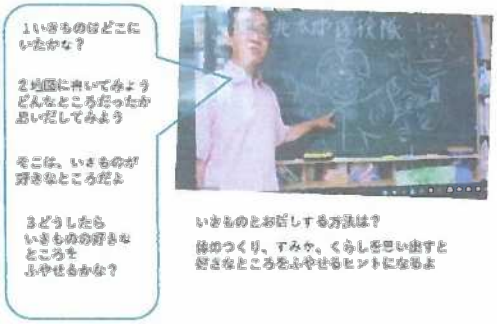
（様式第８号）

たかくなってきたので増えている。

・カニは、ヤマトオサガニ、イソガニ、ヒライソガニのほか県では準危絶滅危惧種のハクセンシオマネキも発見。ハクセンシオマネキはこの干潟ではある程度安定して見られます。砂地を好むので、川から供給される砂が生息できる大きな条件となっています。干潟の魚類トビハゼも発見。

・その後フォローの授業ができなかったので、授業データを担任に送り、当日見つけた生き物類の確認や生き物地図づくり:どこにどんな生き物がいたか？どうしたらいきものの好きなところをふやせるか？を考えてもらうこととした。 今年度の小串での直接授業は以上の３回実施

いいじまさんからのしゅくだい



（様式第８号）

※釣り体験、学習発表会や ZOOM での交流には当法人は不参加。下の写真は学校からの提供画像

・11 月 12 日　岡山市立小串小学校　　学習発表会：近隣の方の指導を受け海岸での釣りを体験。筍採取、干潟の学習と観察した生き物の解説や釣り体験などを発表

・12 月 14 日　ZOOM での交流にて上記の内容を発表し、交流

（様式第８号）

・２月の中和小との交流に向け児童・教師で 12 月８日　竹切り　１月 26 日竹炭づくり

④　真庭市立中和小学校を訪問し、交流。

２月９日　真庭市立中和小学校において、小串小学校児童　７名と交流学習。中和小学校3・4年生７名　合計 14 名　　対面での自己紹介、竹炭プレゼントの後、校庭での雪遊び（ボードに乗って斜面滑降、雪合戦、雪だるまづくり）。昼食後　教室での交流でトランプ、けん玉等を行う。

（様式第８号）

☆真庭市立中和小学校　３･4年生

【　2022 年度　学習の方向性について　】

自地域の自然観察を通して、特に最近少なくなった『ササユリ』にスポットを当て、地域の大人たちへの聞き取りを基に、昔と今の暮らしの違いから持続可能な地域に関して自分たちで考え、地域に発信する。さらに地域の大人たちと新たな行動を起こす契機とする。さらに、小串小との交流により、自地域と小串とのつながりを交流により理解する。

（前年度は、川の自然観察を通して水生の生き物と中和の暮らしについて学習を行った）

事前にササユリを軸にした学習を進めることを学校、当法人、講師飯島氏と共有。

① 5月18日　中和小学校　3･4年生７名　アサザ基金飯島氏による第１回目のZOOMの授業。

※おかやまエコサポーターズ２名は現地の小学校で参加

＜　自然はありがとうのつながりでできている　＞

チャプター1：自然とのつきあい方についての講話

・普段は気づかないけれど中和には素晴らしいところが沢山ある。大人たちも気づいていないお宝を探してどれだけ素晴らしいかを発信していこう。

・山と川、森と川のつながりを分けずに観ていくとたくさんのありがとうのつながりがある。昔の人たちは、山、川、草、牛、鳥とお話しをしていた。

・森の様子は川が水の色を変えることで伝えてくれることがある、昔は中和の川は濁らなかった。土の臭いが川でしたら危険とメッセージを伝えてくれている。 洪水など災害が起きるのは、人間が川や森のメッセージを聞いていないから。

・森は、明るい、暗い、木も大きい・小さいなどあって動物も植物もそれぞれ好きな環境がある。窓の外の森の色を見てみよう。色が違って模様になっているのを動物は見分けている。

→児童達は、針葉樹、竹、広葉樹などによって色が違うことを確認。

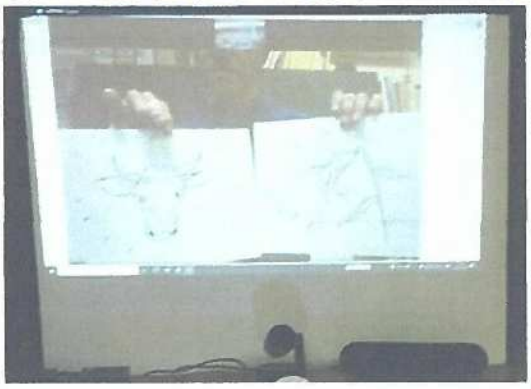
・地質の話し：岡山は花崗岩という地中深くで固まった石が多くあって、その中には鉄が含まれている。中和は八億年前にできた地層で、昔たたら製鉄をしていたところもある。 津黒いきものふれあいの里でもその痕跡が見られる。傍には森があり、はありがとうのつながりが見られる。

チャプター2：ありがとうのつながりを見つけるための活動場所や活動のヒントを提供

（様式第８号）

・おかやまエコサポーターズ小桐より「真庭トンボの森の説明」。50 年ほど前までは牛を飼っていたが、それを止めてからは、森には笹が伸び放題で人が入れなかった。そこに 11 年前からトンボ学生服の社員や真庭市の人たちが入って笹を毎年、何回も刈っていたら、明るい森になって、笹のあとにいろんな種類の草や木が生えてきて、動物・鳥たちもたくさん来るようになった。

・飯島氏より児童達に投げかけ：なぜ、動物が増えたか、どうやって自然はありがとうのつながりを取り戻したのか考えてみよう。



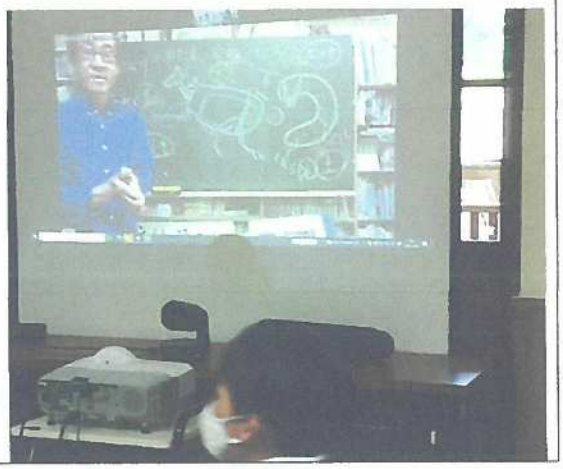
・中和に昔あって今はないものからありがとうのつながりを学んで、これからの新しいありがとうのつながりを考えてみよう。 校庭横の中和神社には牛が祀られている。なぜ牛が祀られている？神社は神様の場所。きっと牛は昔　大切だったはず、どんな風に大切だったか？→児童の発言引き出す

・牛は、昔は田んぼや畑を耕してくれるトラクターだったよ。牛は人間の暮らしの幅を広げてくれた。死んでも肉なって食べられてくれた。一緒に生きる仲間だった。ありがとうでつながっていた。心が通い合っていた。人がやさしくすれば応えてくれる。

・人間は、たくさん草を刈って牛や馬にあげていた、大体１頭で校庭の草を３か月くらいで食べつくしてしまう。中和で有名なササユリは昔どこでも見られていた、でも最近は少なくなっている。ありがとうのつながりがなくなったのかな？

・ササユリのありがとうのつながりはどうなっているのだろう？　ササユリとお話しができればそれが分かるようになる。そのためにササユリの体のつくり（子供の頃と大人でのちがい、暮らし（育ち方）、住処（好きな場所）がわかるとはなせるようになる。

<u>チャプター３：自然との接し方、生き物を通してありがとうのつながりを理解するための、視点の紹介</u>



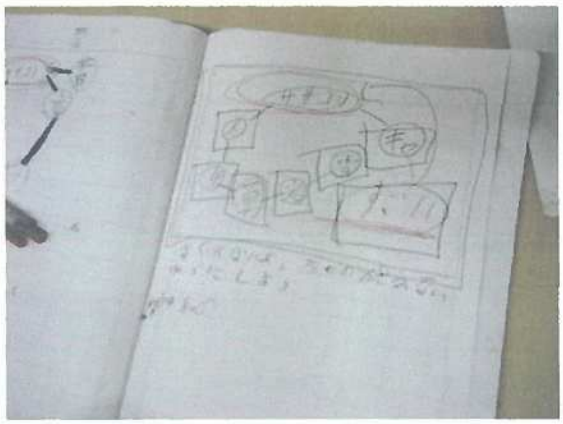
・大人と子供で形の違う生き物がいる。飯島氏はカブトムシの成虫と幼虫の絵を描き説明。大人はどこに住んでいる？→空・木と児童達回答。暮らし＝何を食べる？樹液、頭、胸、腹はどこ？足は胸から生えている。では、幼虫はどこにいる？→　葉っぱの下、土の中、何を食べる？土！と児童達の回答。土は消化が悪いか

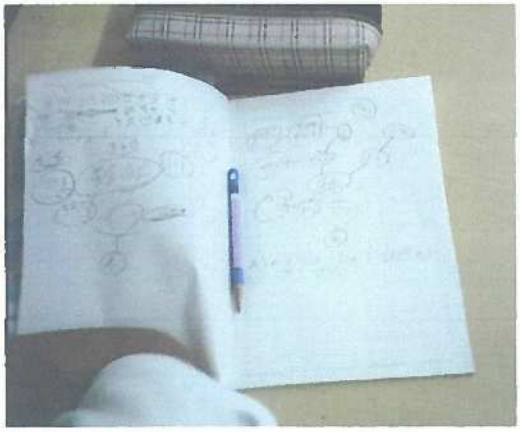
（様式第８号）

ら、長い腸が必要になるだから腹が大きい。→児童達は、一緒に絵を描きながら、体のつくり、暮らし、すみかについて学ぶ。
※飯島氏とおかやまエコサポーターズによる授業支援は 1 回のみ。以後は、学校独自で地域の人々へのヒヤリングを行い、11 月の発表会に向けて授業を行い、まとめを実施。

② 7月11日 中和小学校 3･4年生7名 アサザ基金飯島氏による第2回目のZOOMの授業。
※おかやまエコサポーターズ2名は現地の小学校で参加

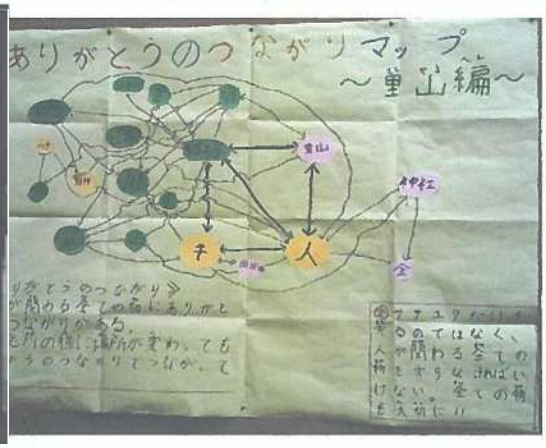
･5 月の授業後、児童達は、ササユリについて近隣住民の方にヒヤリングを行い、自分たちで、ササユリと中和の人々の暮らしについてのありがとうのつながりの図を作成しており、同日はそれを深める授業を行った。方式として、ありがとうのつながりの図を説明し、飯島氏への質問を行うとともに、飯島氏よりアドバイスをもらった。それにより、ありがとうのつながりの図がさらに広がりをみせた。





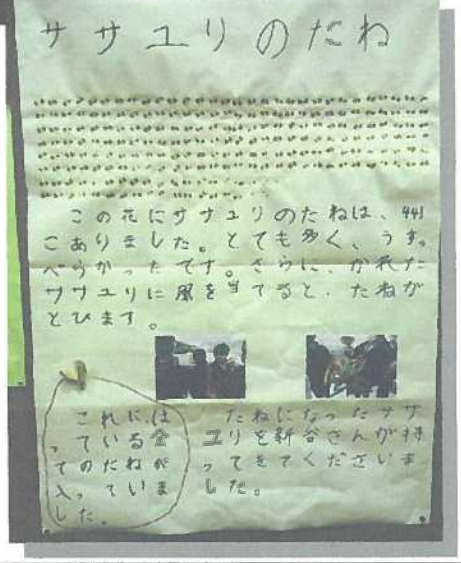
③ 11 月 12 日 中和小学校にて学習発表会の見学。
･毎年この時期に開催。コミュニティスクールのため地域住民や関係者多く参加。真庭なりわい塾受講後、中和に移住した複数の住民が学校の授業にも多く関わっている。
･同校では、いきいき中和の学習と総合学習を位置づけて活動をしており、3 年生以上は、アサザ基金の飯島氏の授業で「自然はありがとうでつながっている。ありがとうのつながりを、地域で探す活動」を身につけている。その結果、自地域のお宝や困りごとを見つけ、自ら問いを立て、地域の多くの住民から話を聞き、体験し、解決策を考えるようになっている。そして、中和の魅力を発信できるようになっている。
･中学年の3･4年生は、今年は 5 月と 7 月の 2 回の飯島氏の授業で、ささゆりの生態と中和の人の暮らしの変化知り、昔と比べて減った理由を地域の人に尋ね、ささゆりの数が元に戻るとはどういうことなのかを学習してきた。そして、種子の採取なども行い、発表会で積極的に地域の方々にプレゼンテーションを行った。

（様式第８号）


ありがとうのつながりマップ
～里山編～
里山
人

絶滅するまえに
ササユリ新聞

昔のササユリの生活
新聞


ササユリのたね
このたにササユリのたねは、441こありました。とても多く、うれしかったです。さらに、かれたササユリに風をあてると、たねがとびます。
これには、全てのたねが入っていました。
たねになったササユリを新谷さんが持ってきてくださいました。

楽時屋さんとササユリの観察
★中和いきいき新聞社★
マンホールにもササユリを発見！！
中和いきいき新聞社が津黒にササユリの観察に行きました。案内してくださったのは、津黒で山岳を営む楽時屋さん。ササユリと周りの環境について、楽しくお話してくださいました。例によって、ガッツリと取材する新聞社員の生き生きとした姿が輝いていました！

（様式第８号）

・12 月 14 日　ZOOM での交流にて上記の内容を発表し、交流

④　小串小学校を招き中が小学校にて交流。

2 月 9 日　真庭市立中和小学校において、小串小学校児童　7 名と交流学習。中和小学校3・4年生 7 名　合計 14 名　内容は、小串小学校で記載した内容と同じ。

☆真庭市立中和小学校　5・6年生の総合学習について　11 月 12 日の発表より

・5・6年生たちは、コロナ前に直接飯島氏の授業を体験した年代。ありがとうのつながりを学び、そこから発展して地域の困りごとを見つけ、課題の解決に向けた提案を考え、地域の方々と協力をして具体的な行動を起こしたことを当日発表した。

・地域課題は、「放置竹林」の活用」。児童達は、鬼ヶ島となった放置竹林を、竹を活用することによって、宝知竹林に変えようと、竹の有効活用並びに竹を使った地域の魅力化イベントを考えだした。発表会後の夕方に竹灯篭イベントを開催することとして実施した。

竹への着目点は、小串小学校との交流により竹炭をプレゼントされたことも学習のきっかけとなっている。

２．ESD の視点

① 事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

（様式第８号）

小串小：学習を通して、地域にある竹やカニなどの干潟・砂浜の生き物が人とのくらしに関わりがあり、自然だけでなく、人間の暮らしも含めてありがとうのつながりがあることを知った。カニを触れなかった児童が生き物を探すうちに触れるようになったことは小さいが顕著な変化。発表に向けて整理することで、地域の自然の価値を理解することが出来た。 中和小：学習を通して、地域の自然だけでなく、地域の人へのヒヤリングを通して、ありがとうのつながりを、自然と人の暮らしという視点で理解できた。そして、発表し、評価を受けることで、地域の魅力を感じるようになっている。５・６年生となり、中学年で学習の方法が、地域課題を自ら見つけ、問いを立て、地域の支援を受けながらも解決方法ができるようになっている。
② どのように学び合いを取り入れたか
・学校との打ち合わせを行い、飯島氏より、児童に質問を投げかけながら、児童に考えてもらう時間を作るとともに、自由な発言を引き出すことで、児童が主体となれるようにした。 ・「自然はありがとうのつながりでできている」を軸に同じ講師により、その地域特性を理解する土壌を作り、交流によりそれぞれの地域の違いを知るようにした。 ・相互に発表をすることにより、自分たちの学習を振り返り、考え、まとめることの提供を行った。
③ どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか
小串小：地域の自然と自分たちの暮らしのつながりを知るために、筍を食べる、伐って竹炭を活用するという体験をすることで理解につながるようにした。 中和小：ありがとうのつながりを体験するために森での学習を予定していたが、コロナ禍の影響で実施できなかった。
３．取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）
目標：小学生の居住地域への愛着を醸成する総合学習により、 ① 地域の魅力や課題に気づき、地域への情報発信を行う。 ②旭川でつながる他地域小学校との交流により、自地域との繋がりや違いを学び魅力課題を理解する。 ③課題解決に向け子どもから地域の大人へ働きかけ、連携して解決に向けた行動を起こせるような人材育成と地域の協力体制を作る。 としていた。 ① については、それぞれの学習発表会、両校のWEB交流会である程度実施できた。 ② ２回の交流学習により、地域の違いは理解することが出来た。つながりについては、小串小・海岸に中和小の児童が行けなかったことで、体験の場が提供できなかった。講師から水や砂の移動によるありがとうのつながりは話しとして伝えた。 ③ 中和小については、コミュニティスクールとして、学校と地域の協力体制が整っており、５・６年生の活動は地域を巻き込む活動にまで発展している。小串小は、地域との連携

（様式第８号）

がまだ弱く十分につながることが出来ていない現状。コロナ禍で地域とのコミュニケーションが十分図ることが出来なかった。
４．今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）
・コロナ禍により、メインの飯島講師を招くことが出来ず、併せて学校との打ち合わせが十分にできなかった。 ・小串地区においては、授業の計画が立て辛く、地域の方々（小串地区の町内連合会、公民館、小串漁協）と打合せが出来ないまま事業終了となった。 ・中和小の５・６年生の竹の活用に関する発表より、中学年から地域とのコミュニケーションをとることで、児童達自身が地域に興味を持ち、課題を自ら見つけ、課題解決を考え、地域に発信し、地域と共に課題を解決する授業となり、教育となっているので、春休み期間に学校と打合せを行い、地域の関係者の方々と連携を図り、地域に学び、地域課題に取り組む授業として継続をしたい。 ・特に小串地区は、温暖化の影響でチヌ（クロダイ）が増え、海苔の食害が増えており、毎年行っていた海苔漉きの体験授業が今年度はできなかった事実がある。放置竹林も広がっており、陸海の地域課題には事欠かない。 ・持続可能な地域を作っていくうえで、飯島氏の「ありがとうのつながり」を軸にした授業は、地域も巻き込むことができるものであると考えられる。３・４年生の授業で、ありがとうのつながりの視点で地域を考えるという基礎を身につけることで、高学年になり、さらに発展が可能である。潜在的な課題を児童の学習により顕在化させ、地域と共に課題を共有し、地域と共に課題解決を考える手法の一つとして、また、他地域との交流により、地域の特性理解ができる手法として継続していきたい。将来的には、飯島氏の手法を地域の大人と共有して、地域の持続性を高める活動にしていきたい。